



2024（令和6）年8月23日発行
（編集）愛光本部
（TEL）043-484-6391
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

毎日暑い日が続いています。夏は、暑さで疲れやすくなります。普段よりもしっかり休息をとるようにして、暑さを乗り越えていきたいと思えます。

学校が夏休みとなるこの期間、法人では、佐倉市ボランティアセンター主催による市内の小中学生ボランティア体験会の受け入れを行いました。法人にとっても、うれしく、有意義な時間となりました。

□事業経過など（2024.7.1～）

1	月	辞令交付式/本部スタッフ会議
2	火	秋まつり実行委員会/業務執行会議
3	水	感染症対策研修
4	木	メンター委員会
5	金	ファミリーフェスタ実行委員会/70周年記念式典 WT/城西国際大学説明会
9	火	防災委員会/安全衛生・感染症対策委員会
10	水	コ・ヒューマントレーニング/子育て応援 WT
11	木	広報委員会
12	金	リスクマネジメント研修
17	水	佐倉圏域実績会議/地域食堂ともいき
18	木	入退所調整 WT/リスクマネジメント委員会/メンティ交流会
19	金	ボランティア委員会
20	土	山王みらいプロジェクト
22	月	テクニカルスキル研修
23	火	コンプライアンス委員会
24	水	地域災害連携 WT/障害者支援事業部実績会議・財務 P
25	木	高齢者福祉事業部実績会議/はちす苑経営 P/地域福祉事業部実績会議
27	土	山王夏祭り
29	月	佐倉市権利擁護部会
31	日	後援会運営委員会

■ 月報から

□ 防犯研修（ルミエール）

30日のスタッフ会議で防犯研修を実施した。防犯のDVDを見て職員からの感想から業務中に起こりうることや過去の事例を挙げて話し合った。津久井やまゆり園の事件から8年が経過し、一般的には忘れられているようだが施設職員ははっきりと覚えており、自分の夜勤中にも不審者がくるかもと考えている職員もいた。施設に来訪することが減少し職員も顔がわからない利用者家族等、一瞬で不審者かどうか判断するのが難しいケースも増えてきている。また、会議の場で防犯カメラの話題にもなり利用者のプライバシーに配慮しつつも利用者の安心安全のために必要であるかについても話し合った。

（ルミエール課長 原 宏之）

□ 体験型の嚙下研修（めいわ）

7月の職員会議で嚙下研修を行った。講師を務めてくれたのは、摂食嚙下研修を半年間受けた職員である。初めに、一口大に砕いたビスケットを「噛まずに飲み込む」体験。これが意外に苦しかったが、ほぼ咀嚼せず飲み込む利用者も多いことを頭に描いた。次に紙コップを用意し、トロミ剤の分量を変えたものを2つ用意する。混ぜ方によっても粘度は変わるとのことだが、分量が多い方は口の中に残り飲み込みづらさを感じる。続いてゼリーを試す。ゼリーは咀嚼が弱い方にはよく提供するものだが、クラッシュした状態とスライスにカットしたもので飲み込み具合を比べると、ゼリーとはいえクラッシュしたものは飲み込みづらく、スライスは安心して飲み込むことができた。食事介助は毎日行う基本的な支援だが、自分が介助される機会はなかなかない。利用者の視点で支援を考え、食べて楽しく学べる良い研修だった。

（めいわ課長 中田 憲一郎）

□ 権利擁護内部研修（根郷通所センター）

今月より月次会議にて権利擁護に関わる“お題”を挙げ、それについての意見交換の場を設定することとした。今月の“お題”は“利用者が手伝ってくれるもの（机の消毒、洗濯物干し等）について”とした。利用者が職員の業務の一部を手伝ってくれているが本来は職員の業務であるはずなのに、それは如何なものか？という内容である。

さまざまな意見や事例が挙げたが“どれも目的やそれに至る経緯があり直ぐに是正すべき内容となるものはなく”手伝いについての否定的な意見はなかった。

事例として、机の消毒や洗濯物干しの手伝いをしている利用者を例に挙げると、元々は空いた時間を持って余すことにより問題行動に至ってしまう人に対して、その対策？支援？と称して職員の手伝いが始まったとのこと。また、食後のテーブル拭きの手伝いをしている利用者については、個別支援計画の作成段階で家族からの要望（職員とのコミュニケーションが目的）で始めた手伝いであったことが分かった。

果たして、この二つの事例であるが、利用者を中心に据えて考えられた手伝いなのだろうか？結果として“職員の業務を手伝うことで役割を持ち感謝され、それが励みになっている”とのことであるがこのままで良いのだろうか…話は尽きない。

今後も30分の枠でさまざまな“お題”を通じて自身の考えや行動を見つめ直す機会としていくこととする。

（めいわ通所部所長 菊地 暁生）

□福祉学習（リホープ）

4日 根郷中学校2年生を対象の福祉学習を行った。本部の相談員がキャリア教育として愛光についてや福祉の仕事についての講義を行った。福祉にスポットを当てた話を聞く機会は少ないので大変良かったと好評だった。リホープ職員は視覚障害者の誘導方法の実習を行った。ガイドヘルプについて簡単に説明した後に実際に二人組を作り、校内を歩いた。校内の慣れている場所では和やかに状況説明をしながら歩いていたが、廊下途中で段差がある場所は初めて行った生徒も多く、怖いと腰が引けてしまう姿が見られた。階段が怖かったとの感想も聞かれた。短い時間の実習である為、怖いという印象もあるが、目が不自由な方にとっては一緒に歩き、周りの状況を声と体の動きで教えてもらえることは大きな安心につながる。一人で歩いている姿を見かけたら声をかけてみたいとの感想も聞かれた。この体験が勇気を出して声をかけられる一つのきっかけになれば嬉しいと思っている。

（リホープ課長 稲垣 直子）

□避難訓練（山王の家）

10日夕食後、自室で過ごしている時に地震が起こり、さらに火災発生の想定をして訓練を行った。前回の消防署員からの助言や反省を踏まえ、避難訓練用・・・ではなく、より日常の動きに近づけ、待機場所や避難経路等よりリアルに想定し行動した。職員の役割も明確に分担した。自主的に机下に避難する利用者もいるなど嬉しい発見もあった。女性利用者については火元前を通らず屋外に避難するルートを初めて使用。職員の誘導もあり大きな混乱はなかった。終了後の考察で、避難ルート上の置き配の荷物や、点呼表の確認漏れがあったりと反省すべき点はあったが、これだけ天災が多くなっている中、繰り返し訓練を行い、実際起こったらと想像しながら一つ一つ確認して進め、万が一に備えて職員、利用者共に覚えていければと思う。

（山王の家管理者 岡本 綾子）

□2024年度障がい者の働く場パワーアップフォーラム（ワークショップかぶらぎ）

ヤマト福祉財団の主催する就労支援系の研修会が7月5日に開催された。ワークショップかぶらぎは就労支援の先駆的な取り組みや理念を学ぶため、可能な限り参加するようにしている。今回のテーマは埼玉県立大学の朝日教授による「働いて暮らす」、日本障害者協議会の藤井代表による「障がいのある人の今をどう読むか」、他3法人の就労支援に関する実践報告であった。

実践報告の中で印象に残ったのは、“ソーシャルファーム”認定を受けて障害のある方を雇用している印刷会社の取組であった。精神障がいや発達障害のある社員を常時10名ほど雇用し、調子のよし悪しのある中、様々工夫して納期厳守で事業を行えているという。

工夫の一例としては共同作業をなるべく減らし、案件は受注した際に製作から納品までの業務担当を決め、個別の業務に振り分けてスタートする。会社は夜間でも仕事ができるようにしており、朝型の人、夜型の人それぞれ自分の調子よく働ける時間帯で仕事を進めていく。また、得意分野を入社後早期に発見するようにし、複数の方の得意分野を集めて業務が進むようにしているとのことであった。

得手、不得手の差が大きい人達の「得手」の集合体を構成することで利益を出せる事業にしていく

考え方は障害のある人の「働く」を考える上では不可欠なのだと再確認できた。今回の学びを踏まえ、かぶらぎの作業場を今一度見直し、利用者の仕事が社会にしっかりと価値を示し、彼らが「働き甲斐」を感じられるよう支援していきたい。

(ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹)

□医療判断の難しさ (ジョーの家)

高齢化社会が進む中、ジョーの家のような施設では、入居者の健康状態が日々変化し、医療的な判断が求められる場面が増加している。定期的な通院は本人の報告に任せても良いケースもあるが、突発的な検査や症状の変化など、状況判断が難しいケースも多く、医療連携も必要となっている。また世話人の状況判断能力の重要性も感じており、日々の生活の中で入居者と接する世話人の観察力は、医療的な判断において非常に重要であり、その能力の向上と支援体制の構築が求められる。これらの課題に対して、医療に関する知識、介護の基礎知識、応急処置など、必要な知識を体系的に学ぶ機会を提供する研修会の必要性も感じている。

(ジョーの家 高橋 健)

□卒業後アフターケア (よもぎの園)

梅雨も明け、本格的な夏が始まった。盲学校や特別支援学校も夏休みに入り卒業後の生徒の様子を確認するアフターケアの時期になった。よもぎの園でも千葉盲学校、印旛特別支援学校の生徒を受け入れているので、それぞれの教諭が様子を見に来てくれた。

よもぎの園としても教諭が来所してくれることはありがたく、学校での本人への支援方法などを再確認できる時間である。教諭も卒業生の家の顔、学校での顔、そして社会人になった顔と新しい一面を見ることができたことと思う。よもぎの園に元気に通所している姿を見ていただき、これからも実習や卒業後の進路の一つとしてあり続けていきたい。

(佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一)

□生きがいみつけた (はちす苑)

デイサービスのクラブ活動「園芸班」は、ご利用者に大人気の活動である。

はちす苑の正面玄関右、デイサービスの外で、花や野菜を育てている。ご利用者が、種を蒔いたり、水をあげたり、雑草取りをしたりと活動している。班員というくくりはなく、活動時間にご利用者皆さんに向けてお声がけすると、皆さん、我も我もと希望の手が上がる。鑑賞する楽しみと収穫して食べた人から「美味しかった」という、人に感謝される結果が皆さんのやりがいに繋がっている。

人は高齢になると「何もできない人」「動いたら危ない人」と認識されてしまうようである。しかし、デイサービスでは活躍できる人たちとなる。この夏は、猛暑の影響で野菜がたくさん実り収穫は大忙しであったが、皆さんの笑顔も大収穫であった。

(はちす苑 苑長 安部 一義)

□介護予防リーダー交流会「ポッチャで交流しよう！」 (南部地域包括支援センター)

3日(水)、今年度 1 回目となる「介護予防リーダー交流会」を開催した。介護予防リーダーとは、地域での介護予防活動の運営や介護予防の知識の普及などを行うボランティアで、佐倉市では養成研修を実施している。南部包括でも、としとらん塾開催時の運営やオレンジカフェのお手伝いなど協力を依頼し、包括の事業に欠かせない存在となっている。

今回は南部包括に登録されている方のうち15名が参加され、「ポッチャ」を通して交流を図った。ゲームは4チームに分かれトーナメント形式。さすがは介護予防リーダーの皆さん、ほとんどの方がポッチャの経験があり、お互い投げ方等を教え合って盛り上がっていた。最後は少しの時間ではあったが情報交換を行うこともでき、楽しい時間を皆さんと過ごすことができた。

リーダーの皆さん高齢者で活動を卒業される方も増えているが、少しでも長く継続して活動しようという気持ちを持ってもらえるよう、包括としても活動支援を行っていきたい。

(南部地域包括支援センター管理者 森 由美子)

□ふれあいサロン南部 (南部地域福祉センター)

当センターの一つの事業が事情により年度の途中で中止になったため、それに代わる体操の企画を取り入れることになった。当センターに訪れる高齢者の多くは、今日の健康志向の高まりもあって、体操の講座にとっても興味があり、それらのニーズに早く対応することが求められている。「まちかどエクササイズ」は、「ヤマハウエルネスプログラム」を用いて、運動と音楽の組み合わせにより、認知機能の維持、改善をめざしているとのこと。7月23日(火)より、南部地域福祉センターB棟研修室にて開催。初回は23名(定員25名)の参加があり、リズム体操やリズムウォークが行われた。

(南部地域福祉センター 青山 秀人)

□5年ぶりの復活！「おばけやしき」(佐倉市南部児童センター)

「おばけやしき実行委員募集」のポスターを見て興味を持って集まった子どもたち15人。

4月から全10回の「おばけやしき実行委員」の活動が始まった。

テーマは「夜の学校 カラダ探し」。おばけやしき実行委員の子どもたちは、映画「カラダ探し」の影響から作りたかったと思ったようだ。メインルートは「音楽室」「理科室」「保健室」の3部屋に決まり、3グループに分かれて活動することになった。

5月に「ポスター」作り、6月に「小道具・大道具」作り、7月に「リハーサル」を行い、7月30日、「おばけやしき」当日、受付などに高校生のボランティア7名も参加し、心強い助手となった。

いよいよお客さんの入場。直前までザワザワしていた会場が一瞬にして静まり返った。スタンバイする子どもたちから緊張が伝わってくる。お客さんは無反応の人もいて、脅かすタイミングが難しいようだ。でも、「キヤーッ！」という声を聞くと、うまくできたとニヤリ。開催時間中、道具が壊れるなどのハプニングにも子どもたちは迅速に対応。職員と確認しながら間合いを見て進行していた。もはや4月当初からは想像できないほどたくましくなっていた。入場前に、受付で「楽しみ～」と言っているお客さんがたくさんいたことや、出口では「楽しかった～怖かった～」と言っていたことを聞き、実行委員の子どもたちはお客さんに楽しんでもらって、とても嬉しく思ったようだ。

来場者は163人。当日は室内いっぱい長蛇の列になった。おばけやしき実行委員の反省会では、最後に「楽しかった人？」と聞くと、全員が一斉に「ハイ！」と手を挙げた。『来年はもっと面白い「おばけやしき」が作れると思う』という声もあがった。

4か月間に渡った今年の「おばけやしき実行委員」は来年への大きな足掛かりになる実績ができたようだ。

※今回の「おばけやしき」は、子どもの声を具体化していく実践の促進を目的とした【子ども Do まんちプログラム】応募し、採択となった。一般財団法人児童健全育成推進財団様からいただいた2万円を活動資金として運用した。

(南部児童センターインストラクター 吉田 知加子)

□短冊に願いを込めて… (学童保育所)

学童室の前に笹を飾ると、子どもたちから「笹飾り作るー！」の声。輪飾りや三角繋ぎ、四角繋ぎなど、様々な笹飾りに入り口がとても賑やかになった。短冊には『漢字がたくさん書けるようになりますように』『みんなの願い事が叶いますように』『歯が早く抜けますように』など、個性溢れる子どもたちの願い事がたくさんあり、お迎えに来た保護者も「えー！こんな事思っていたの！？」と、和みの時間となっていた。そんな中、男の子の願い事の中に「学童の先生になれますように」と、書かれていた。「だって楽しそうなんだもん！」と、答えてくれた男の子の笑顔を見て、さらに学童保育所が楽しい場所になるように努力していこうと思う出来事であった。(寺崎学童)

(学童保育所主任 平野 美幸)